閻浮提中御書

新版 2047 2049

閻浮提中御書

閻浮提の中に飢餓の劫起こる」。また云わく「また閻浮提 えんぶだい こう 弘安元年(%) こうあんがんねん えんぶだい 57

閻浮提の中に疫病の劫起こることを示現す」等云々。 えんぶだい の中に刀兵の劫起こることを示現す」。また云わく「また なか とうびょう なか えきびょう こう こうお じげん じげん とううんぬん

にんのうさんじゅうだい ひゃくさいこく せいめいおう

人王三十代に百済国の聖明王、□□□□国にわたす。王

これを用いずして三代仏罰にあたるべし。釈迦仏を申し隠 さんだいぶつばち しゃかぶつ

すとが□□念仏者等、善光寺の阿弥陀仏云々。上一人より下 ねんぶつしゃとう ぜんこうじ あみだぶつうんぬん かみいちにん

万民にいたるまで、皆人迷惑□□ みなひとめいわく

天はすべてこの国を□□□□二に云わく「 経 を読誦し書持 これをあらわす日蓮にあだをなす人はすべて日蓮を犯す。
ゅいというにちれんのといるというにちれんのおかい。 きょう どくじゅ

等云々。また云わく「多病 痟 痩なり」。第八に云わく「 諸 とううんぬん することあらん者を見て、軽 賤憎嫉して、結恨を懐かん」 の悪 重 病 あるべし」。また第二に云わく「もし医道を修し あくじゅうびょう じゅん もの やまい たびょうしょうしゅ きょうせんぞうしつ だいに だいはち やまい けっこん いどう もろもろ

人の救療することなく、 いはまた死を致さん」。 また云わく「もし 自 ら 病 有らば、 方に順じて病を治せば、さらに他の疾を増し、ある たとい良薬を服すとも、しかもま ろうやく みずか やまい

た増劇せん」等云々。

ぞうぎゃく

とううんぬん

御室より下一切の東寺の門家は、 なお及ばず」等云々。 わく「法華経は真言経に及ばず」と云々。この三師を用い おむろ る国主、終に皇法尽き了わんぬ。 云わく口口 こくしゅ えいざん こうぼうだいし 叡山の座主ならびに三千の大衆口、日本国の山寺一同に 弘法大師は「後に望めば戯論と作る」と。 およ じょうきゅう 承 久に御室思い死にせし、これなり。 ほけきょう つい ざ しもいっさい]□□大日経等云々。智証大師云わく「法華すら とううんぬん おんじょう ちょうり おうほう おむろおも しんごんきょう のち だいにちきょうとううんぬん ちしょうだいし い とうじ のぞ 園 城の長吏ならびに一国の末 流皆云 さんぜん お もんけ およ けろん だいしゅ 法華経を「戯論」と云々。 ほけきょう みょううん ざ す 明 雲座主の義仲に殺され うんぬん にほんこく いっこく まつりゅうみな い 東寺の一門、 とうじ けろん よしなか さん じいちどう さんし ころ いちもん うんぬん もち

願わくは、我が弟子等、

師子王の子となりて、群狐に笑わ

でしとう

ししおう

責めなおおそろし、いおうや閻魔のせめをや。日本国のせめせ、準を変し、いおうや閻魔のせめをや。日本国のせめ をすてて強敵の科を顕す師には値いがたかるべし。国王の 人の、すこし心のゆるなるをすすめんがために、疫病を は火のごとし。裸にして入るとおもえ。

は火のごとし。裸にして入るとおもえ。 るることなかれ。過去遠々劫より已来、 は水のごとし。ぬるるをおそるることなかれ。閻魔のせめ 大涅槃経の文の心は、仏法を信じて今度生死をはなるるだいねはんぎょう もん こころ ぶっぽう しん こんどしょうじ 離 ごうてき こころ か こ おんのんごう 況 えんま このかた 責 こんどしょうじ にちれん 日蓮がごとく身命 にほんこく えきびょう こくおう しんみょう

仏 のあたえ給う。はげます 心 なり、すすむる 心 なり。 にちれん 日蓮は凡夫なり。天眼なければ、一紙をもみとおすこと たも 励 こころ

なし。 えて、退する心 なかりしかども、度々あだをな口口。 をおさめてあだをなせしかば、凡夫なれば道理なりとおも 欠) この経 文のごとく、日蓮は肉眼なれども、 れ皆、法華経の御力なり。しかるを、国主は、讒臣等が凶言 の旨趣をあらあらすいちし□□我が 朝 の亡国となるべき □□□日本国七百余歳の仏眼の流布せしよう、 こと、先にこれをかんがえて、あたかも符契のごとし。 の邪 正、漢土・月氏の論師・人師の 勝 劣、八万・十二の仏 経 じゃしょう かんど がっし ろんじ にんし しょうれつ はちまん じゅうに ぶっきょう ほけきょう 宿命なければ、三世を知ることなし。しかれども(中 しゅくめい さき に ほ んこくななひゃくよさい ぶつげん きょうもん こころ おんちから にちれん にくげん ぼんぷ こくしゅ ちょう ふけい ぼうこく ざんしんとう 八宗·十宗 はっしゅう てんげん 天眼・宿命 じっしゅう しゅくめい きょうげん

そうら 候いぬ。されども、凡夫なれば、かんも忍びがたく、 美食をおさめぬ人なれば、力およばず山林にまじわりびしょく 納 ひと ちから ちから さんりん 交 じき 乏 ばんり いっさんしの 熱を

もふせぎがたし。食ともし、表口目が万里の一餐忍びがた ししこう じっしゅん くはんた 思子孔が十旬の九飯堪うべきにあらず。読経の音も絶 どきよう こえ

えぬべし。観心の心 おろそかなり。

かんじん

こころ

きょうしゅしゃくそん 教主釈尊の御すすめか、はたまた過去宿習の御催し しかるに、たまたまの御とぶらい、ただ事にはあらず。 おん おん か こ しゅくじゅう おんもよお

方々紙上に尽くし難し。 かたがたしじょう 恐々謹言。 きょうきょうきんげん